

能楽の大家 世阿弥から学ぶこと その①「風姿花伝」

24日の前日祭から始まった第74回ぎんが祭は感動のうちに27日終了を迎えました。経験したことのない不安の中で「正解」よりも「納得解」を模索し積み重ねた日々は、3年生のやりきった感動の涙に、答えを見た気がしました。生徒たちの文化祭での風景に、世阿弥の「風姿花伝」を、改めて考える機会になりましたので雑感をお届けします。



華道部生徒全体作品(あえて後ろからが私は感動しました)

書道部作品 みずみずしさと躍動感が際立ちます

同窓会の「学園文化祭」の作品も拝見しました。同じ「華道」「書道」の作品に、継承された蟻高生の「しなやかさ」を感じました

「風姿花伝」の第一章は年齢に応じた7段階の「稽古の仕方を示すもの」。対処の仕方や歳を経る自らについて説く内容

幼年期(7歳頃):能では7歳頃から稽古を始める。この年頃の稽古は自然にやることの中に風情があるので稽古でも自然に出てくるものを尊重し子供の心の赴くままにさせたほうが良い、怒ったりするとやる気をなくしてしまう。

少年前期(12歳～13歳):稚児の姿。声といい姿といい、それだけで幽玄を体現していて美しい。しかしそれはその時だけで「時分の花」であり「本当の花」ではない。だからその時が良いからといって生涯のことがそれで決まるわけではない。

少年後期(17歳～18歳):この時期を世阿弥は「人生で最初の難関がやってくる」と言っている。「まず声変わりぬれば第一の花失せたり」声変わりという身体上の変化が加わりその愛らしさがなくなる時期が第一の難関。その苦境をどう生きるか。世阿弥は「たとえ人が笑おうともそんなことは気にせず自分の限界の中で無理をせずに声を出して稽古せよ」と説いている。本人も才能があると思っていたところに身体の変化。しかしそういう時こそ人生の境目であきらめずに努力する姿勢が後に生きてくる。限界のうちに進歩がない時にはじっと耐えることが必要だ。そこで絶望したりあきらめると結局は自分の限界を超えることができなくなる。無理せず稽古を続けることが次への飛躍となる。

青年期(24歳～25歳頃):この頃は身体も一人前となり若々しく上手に見える。人々に誉められ時代の名人を相手にしても新人の珍しさから勝つときもある。新しいものは新鮮に映り世間にもてはやされる。そんな時に本当に名人に勝ったと勘違いし自分は達人であるかのように思い込むことを世阿弥は「あさましきことなり」と切り捨てている。そういう時こそ自分を「まことの花」にするための準備は必要、「時分の花」が咲き誇るときにこそ稽古が必要と説く。

壮年前期(34歳～35歳頃):ちょうど世阿弥が「風姿花伝」を著した時期。この年頃に天下をとらねば「まことの花」とは言えない。上手になるのは34～35歳まで。40歳すぎればただ落ちていくのみ。だからこの時期に人生を振り返り今後の進むべき道を考えることが必要。自分の生き方、行く末を見極める時期である

壮年後期(44歳～45歳頃):「よそ目の花も失するなり」。どんなに頂点を極めた者でも衰えが見え始め観客には「花」があるようには見えなくなる。この時期でもまだ「花」が失せていなければそれこそが「まことの花」。この時期に一番なくてはいけないのが後継者の育成。自分が体力も気力もあるうちに自分の芸を次代につなぐ最適の時期。「ワキのシテに花をもたせて自分は少な少な舞台をつとめよ」。後継者に花を持たせる。自分の身を知り限界を知る人こそ名人である。

老年期(50歳以上):能役者の人生最後の段階。「もう花も失せた50歳過ぎの能役者は何もしないというほかに方法はないのだ。それが老人の心得だ。それでも本当に優れた役者であればそこに花が残るもの。」

世阿弥が説く「7段階」は、何かを失う衰えの7つの段階。父の観阿弥は「控えめな舞に老木に花が咲く」そんな芸術の完成形でした。何かを失いながら人は生きていくなか、新しいものを得る試練の時、それが世阿弥の説いた「初心忘るべからず」なのです。(次号は「初心忘るべからず」について考えます)